

◆先日、大阪で開催された関西同窓会総会に出席した際、48期の大先輩関口貞雄さんと懇談する機会がありました。その時、関口さんから我々が高校生時代の校長、清水次郎先生の興味深い話を伺いました。関口さんの調査によると清水先生は備中高松城（旧清水城）城主清水宗治の子孫とのこと。（詳細は関西同窓会会報 FB、2015年9月22日付けを参照）

◆そう言われてみると清水先生は古武士然とした風格のある方でした。

以下、関口さんがFBに投稿された一部分を紹介します。（17.9.19 上原昇）

備中高松城主清水宗治の末裔、清水次郎校長

関口貞雄（48期：関西同窓会）



清水次郎先生は大正13年（1924年）上田中学校を卒業し（23期）、松本高等学校から東大文科（西洋歴史専攻）を卒業した。満州国へ渡って国务院の官吏となり、総務庁で教育行政を担当し、終戦時には総務部次長として全満州国の小学校、中学校、大学の教育行政を統括する要職にあった。従ってソ連軍が進駐して来た時、文官でありながら捕らえられ、シベリアへ抑留され、強制労働に従事させられる不運に見舞われた。3年間の収容所生活で辛うじて生き残り、昭和23年（1948年）の秋、故郷の丸子町へ帰り着いた時は骨と皮ばかりの痩せ衰えた姿だった。約半年間の栄養補給で体力の回復に努め、昭和24年（1949年）4月から母校の教壇に立つことになった。丁度新教育制度による新制高校が発足し、上田松尾高校となって2年目で、清水先生は西洋史を担当された。先生の授業はそれまでの歴史授業と異なり、大学の講義方式で黒板へ書くことは少なく、専ら生徒に要点を筆記させた。期末試験は課題を出してレポートを提出させる方式で、我々生徒は戸惑った。先生は提出されたレポートを読まれて問題点を指摘し、容赦なく突き返し、再提出を求めた。私も再提出して何とか及第点を貰った記憶がある。先生は授業で「歴史の流れを注視し、理解なさい。」とよく云われ、戦後間もなく出版されたシュペングレー著「**西欧の没落**」を紹介し、熱心に解説された。冷戦の始まる前で、対独戦での勝利に酔う英、

仏の将来像を見事に予測した内容であったと記憶している。しかし高校3年生は大学受験を控えており、入試問題とかけ離れていると生徒が質問すると、「私の大学同級生で親しかった吉岡力君（東大教授）の著書「世界史の傾向と対策」（旺文社）はよく書かれているので、参考書にしてください。」とやや無責任な答えが返ってきた。私にとっても大学入試に清水先生の講義は余り役立つことはなかったが、社会人となり年を重ねるに従って先生の教えがよく判り、大変参考になったと思う。

授業中先生は一言も満州国での華やかな経歴、シベリア抑留の体験を話されなかった。多くの仲間が帰国を夢に見ながら死んでいったことを思えば、到底自分からは口にする気にならなかったのでしょう。生徒の誰も敢えて質問する者はいなかった。上田高校で数年間教鞭をとり、前歴を買われて松本県丘高校の校長に就任され、昭和38年（1963年）4月、母校上田高校の13代校長として赴任された。4年間に在任して母校の発展に手腕を発揮し、昭和42年（1967年）3月に退職された。

シベリア抑留生活で蝕まれた健康のため、老後を楽しむことなく間もなく病死された。小柄で温和な風貌の中にも時折見せる鋭い視線と身についた風格から、付いたあだ名が名前をもじって「次郎長先生」であった。しかし今考えてみると、戦国武将清水宗治の面影を漂わせる風貌であったと懐かしく思い出す。

（上田高校関西同窓会会報フェイスブック投稿文（一部）から）

【写真：65期6組、卒業時に清水校長を囲んで（65期HPから）】

